

## [研究論文]

# 談話における無助詞の機能をめぐって

今 西 利 之

### 要 旨

本稿では、述語との格関係があるにもかかわらず名詞（句）に格助詞も提題助詞もつかず無助詞で文中に出現している文（無助詞文）を取り上げ、先行研究における無助詞に関する様々な議論を概観しつつ、談話における無助詞の機能について考察した。その結果、無助詞は、対人性が強い談話において、話し手と聞き手の両者が発話時以前（または発話と同時に）認識していると話し手が考えている「もの」や「こと」で、発話時においてある談話の主題とはなっていない「もの」や「こと」を、談話の冒頭で新たな主題に設定するという機能があることを明らかにした。

## 0. はじめに

日本語は、名詞（句）と述語とのあいだに成り立つ意味関係である格が名詞（句）につく格助詞によって、また、その文が何について述べるのかを示す主題が名詞（句）につく提題助詞「は」によって表示されるとされる。しかし、述語との格関係があるにもかかわらず、名詞（句）に格助詞も、また提題助詞もつかず、無助詞で文中に出現している文（以下、無助詞文）が存在する。本稿は、日本語の無助詞文を取り上げ、談話における無助詞の機能について考察することを目的としたものである。

以下、第1節では、本稿で考察する無助詞に関する問題の所在を説明する。続く第2節では、無助詞、無助詞文に関する主な先行研究を概観し、これを踏まえた本稿の立場と考察の対象を示す。次に第3節では、先行研究での指摘を踏まえながら、無助詞文、無助詞が出現する場面・談話、無助詞文の特徴を整理し、第4節では、前節での整理を踏まえ、談話における無助詞の機能について本稿の考えを提示する。最後に、第5節では、本稿のまとめと今後の課題を述べる<sup>(1)</sup>。

## 1. 問題の所在

次の(1)は、湯呑みをひっくり返して食卓や床にお茶をこぼしてしまった人が、食卓から少し離れた台所にいる人に対して発したものである<sup>(2)</sup>。

(1) ごめん、ふきんφ、とって！ お茶φ、こぼしちゃった！

日本語記述文法研究会編（2009a）では「名詞と述語とのあいだに成り立つ意味関係を表す文法的手段を格という。これらの意味関係は、名詞につく格助詞によって表される。」とある。（1）において、名詞「ふきん」と述語「とる」、名詞「お茶」と述語「こぼす」とのあいだに成り立つ意味関係（格）はいずれもの「対象」である。そして、その意味関係（格）を表すために名詞につく格助詞は「を」であると考えられる。しかし（1）では格助詞「を」は用いられていない。一方、次の（2）は、（1）に格助詞「を」を入れたものであるが、前述と同様の発話、すなわち、湯呑みをひっくり返して食卓や床にお茶をこぼしてしまった人が、食卓から少し離れた台所にいる人に対して発したものとしてはやや座りの悪いものであると考えられる。

（2）？ごめん、ふきんをとって！ お茶をこぼしちゃった！

さらに、日本語記述文法研究会編（2009b）では、「その文が何について述べるのかを示すもの」を主題とし、助詞「は」が主題を表す典型的な表現（以下、提題助詞）とされているが、（1）の名詞に提題助詞「は」をつけた次の（3）も、前述と同様の発話としては不自然な文である。

（3）\*ごめん、ふきんは、とって！ お茶は、こぼしちゃった！

以下、本稿では述語と名詞（句）との間に成り立つ意味関係（格）を表す格助詞や提題助詞「は」などが用いられていない現代日本語として自然な文を「無助詞文」と呼ぶこととする。

無助詞文は、（1）のように、親しい関係にある者の会話やくだけた会話などの話しことばで用いられることが多いと一般的に考えられている。鈴木重幸（1972）では、「はだか格」の一つとして、「会話文などで、主語や対象語として用いられる。このばあい、『-は』『-が』の形の主語、『-を』の形の対象語の文体論的な変種としてのニュアンスをもつ。」とされている。また、日本語記述文法研究会編（2009b）では、『「は」』などの助詞を伴わない無助詞の形で主題が提示される。」とした上で、「無助詞による主題の提示は、あらたまっていないスタイルの話しことばや、親しい人どうしのくだけた会話に多い。」とされている。しかし、次の（4）は、この解説では説明することができない無助詞文の使用例である。

（4）メール  $\phi$ 、確かに受け取りました。

（4）は、仕事に関して送られて来たメールに対して、受信の報告を目的とする返信メールの冒頭の文であり、親しくない相手に対するあらたまったスタイルの書きことばとして使うことができる。また、名詞「メール」と述語「受け取る」とのあいだに成り立つ意味関係（格）は

「対象」であり、その意味関係（格）を表すために名詞につく格助詞は「を」であると考えられるが、同じ場面で格助詞「を」を用いた次の（5）を使用するとやや座りの悪い文であると思われる。

（5）？メールを確かに受け取りました。

また、（4）の名詞「メール」に提題助詞「は」をつけ、その文の主題が「メール」であることを明示的に示した次の（6）も、返信メールの冒頭の文としてはかなり座りの悪い文である。

（6）?? メールは確かに受け取りました。

これらのことから、話しことばであるか書きことばであるのかにかかわらず、また、あらたまった文体であるのかくだけた文体であるのかにかかわらず、さらに、親しい人とのやりとりであるかどうかにかかわらず、無助詞文であることが日本語として最も自然な場合があることがわかる。

では、無助詞文はどのような場面・状況で用いられるのであろうか。また、無助詞の名詞（句）は文中でどのような機能を果たしていて、無助詞であることにどのような意味があるのだろうか。本稿は、これらの点について考察することを目的とする。

## 2. 先行研究と本稿の立場・考察の対象

無助詞文を考察の対象とした先行研究は少なくない。以下、主な先行研究を概観し、その論点を整理する。その上で、本稿の立場と考察の対象を示す。

### 2.1 「無助詞」か「助詞の省略」か

前述したように、名詞と述語との意味関係である格は日本語では格助詞によって表わされるとされる一方で、格助詞が使用されていない文が存在する。この現象を「無助詞」とするのか「助詞の省略」とするのかという議論がある。

丹羽哲也（1989）が言及しているように、このテーマは、山田孝雄（1908）で「独立提題語」、松下大三郎（1928）で「単説」と呼ばれるなど「主題」との関わりの中で論じられる一方で、渡辺実（1971）で「無形化」、鈴木重幸（1972）で「はだか格」と呼ばれるなど「格」との関わりで論じられている。この流れを受け、丹羽哲也（1989）は、無助詞に関して、「主題を表す場合と、単に格助詞の省略と考えるとよい場合がある」とし、主題を表す場合の典型として次の（7）のような文脈照応の場合を、単に格助詞の省略と考えるとよい場合の典型として

次の(8)のような疑問語に助詞がついていない場合を挙げ、両者の違いを(相対的であるとしつつ)主題性の高低に求めている。

(7) 太郎はどう? - 駄目だよ。あいつ $\phi$  (は) まだ学生だよ。

(8) いま誰 $\phi$  (が) 来てるの?

丸山直子(1996)も、次の(9)(10)を例として、名詞句に格助詞「を」が使われていない(9)を「単なる助詞の省略」、助詞を挿入するとすれば「を」ではなく「は」がふさわしい(10)の無助詞の名詞句を「主題性を帯びた成分」とし、両者を区別している。

(9) 函館で「いかソーメン」食べるの忘れたでしょ。

(10) この手袋、誰が買ってくれたの?

ただし、その直後に「この二種類は厳然と区別されるものではなく、ある場合に、主題性がより強く感じられる、といった類のものである」としたうえで、「総じて、小さく係るもの(直後の述語に係る、埋め込み句の内部の述語に係る、など)は単なる省略と意識され、大きく係るもの(離れた述語に係る、文頭に位置する、など)は、主題性が高いと意識される」としている。

一方、加藤重広(1997)は、それまでの多くの先行研究を踏まえつつ、「格助詞などがないことによってある種の機能が生じている」のか「助詞はあってもなくても変わらない」のかを区別するのは容易でなく、「両者を区別する科学的根拠が見あたらない」「判断するのは論者の言語直観のみである」と述べたうえで、「〈助詞の省略〉と判定されるような例でも、助詞の有無に文体やニュアンスなども含めて全く影響を受けずにすむということはない」とし、両者を一括して「〈ゼロ助詞〉」として扱っている。そして、「〈ゼロ助詞〉を使うことにはそれなりの談話効果がかならずあり、話者はそれを意図に応じて無意識に使い分けているのである」と述べている。

本稿では、「主題性の高低」に関する議論、及びそれに基づいて「助詞の省略」と見るかどうかという議論は行わず、加藤重広(1997)の考えを踏襲し、形態的に助詞が使われていないこと、すなわち無助詞であることに積極的な意味を見出し、無助詞であること(助詞の有無)がその文の意味になんらかの影響を与えているという立場をとり、考察を進めることとする。

## 2.2 どのような格が無助詞になりやすいか

名詞(句)と述語との意味関係である格にはさまざまなものがあるが、どのような格の場合に無助詞になりやすいのかという課題を設定し考察した先行研究がある。

丸山直子（1995）では、対話データに対する計量的な分析に基づき、「格表示の無形化は、ガ格・ヲ格・ニ格の格成分に起こる場合が、そのほとんどをしめる。」とした上で、無形化の起こりやすさの理由を、名詞と述語との結びつき（格関係、結合価）の強さ、述語と名詞と間に他の構成要素が存在するかどうか、主題性の高さに求めている。また、加藤（1997）は、ガ格・ヲ格・ニ格・テ格・ト格をはじめとするさまざまな格を対象に、名詞と述語との格関係の違いによる助詞の脱落の可否についての詳細な考察を行い、「『が・を』はどの用法でも無助詞化が可能、『と・から・まで・より』はどの用法でも無助詞化が不可能、その中間のグレーゾーンにあるのが、『に』と『で』だと言えよう」としている。

どのような格が無助詞になりやすいのか、そしてそれぞれの格がどのような条件で無助詞になるのかを明らかにすることは非常に興味深い課題である。しかし、本稿ではこの課題は考察の対象外とし、名詞（句）と述語とがどのような格関係にあるのかは問題としない。

### 2.3 どのような文で無助詞になるか

先行研究では、文の叙述内容や表現類型の違い、どのような場面や状況での発話であるかを中心に、どのような文で無助詞となるのかについての議論も行われている。

甲斐ますみ（1991）は、どのような文で「は」が省略可能であるのかについての考察を行い、その中で、名詞（句）については、「その他の条件が同じなら X（筆者注『は』によってマークされる名詞（句））が 1・2 人称の方が 3 人称に比べて『は』を省略しやすい」としている。また、文の表現形式に関わる条件として、「確定」の原則と「聞き手への配慮」という二つの原則に省略の可能性が支配されているとし、前者に関して「話者は当該事象を真だと確信し、それを強く主張する場合『は』は省略しにくい<sup>(3)</sup>、後者に関して「聞き手への配慮がある程『は』は省略し易くなる」としている<sup>(4)</sup>。また、考察の中で、「『は』も『が』も使えない文は発見的な事態をとっさに言語化する際に使われるようである。」との指摘をしている。

さらに、尾上圭介（1996）や黒崎佐仁子（2003）は、無助詞文の分類を行っている。尾上圭介（1996）は「主語にハもガも使えない文」を考察し、「存在の質問文の類」「教え・勧め・同意要求・質問・感嘆の類」「内容が話し手が聞き手のことに確定している文」の 3 種類に分類、黒崎（2003）は「ハ」「ガ」「ヲ」省略の条件の考察を行い、無助詞文を、「文単位からの分類」である「聞き手の情報を求める文」「聞き手への要求を表す文」「話し手、聞き手が主題の文」「眼前の事象について述べる文」「現象描写文の疑問文」「特別な表現」、「談話単位からの分類である「新しい話題の新規導入文」の 7 つに分類している。

本稿では、これらの考察を参考とした上で、主にどのような状況や場面、及びどのような談話の中で無助詞文が使われるのかについて考察する。

## 2.4 無助詞の機能

先行研究では、2.3節で触れたどのような文で無助詞になるのかを踏まえつつ、無助詞がどのような機能を有しているのかについての考察が行われている。

尾上圭介(1996)では、前述の「主語にハもガも使えない文」の分類を踏まえた上で、無助詞の機能について、「提題、対比の意味を出さないようにするために、『は』も『が』も使わない」としている。

また、加藤重広(1997)では、次の(11)<sup>(5)</sup>の「ケーキ」と「ほしい」は情報として同じ重みを持っている、(12)<sup>(6)</sup>の「指輪」と「はめている」では「はめている」のほうがより重要な情報であるとし、「〈ゼロ助詞〉がつくことで『が』のある名詞句に対する焦点が解消されていると解釈すれば、〈ゼロ助詞〉の機能は〈脱焦点化 (defocusing)〉と見ることが可能である」と述べ、「〈ゼロ助詞〉の脱焦点化に関する仮説」として、「〈ゼロ助詞〉は脱焦点化機能を有する。脱焦点化機能とは、NP-CM-Pred という形式の文の中で、NPが最重要情報である、すなわち、InfoP (NP) > InfoP (Pred) が成り立つ、と解釈されるのを回避する機能である。従って、NP- $\phi$ -Pred という文では、情報の重要度は InfoP (NP)  $\leq$  Info P (Pred) と解釈される。」と述べている。

(11) 「ねえ、ケーキ $\phi$ もらったんだけどね。どう？ ケーキ $\phi$ ほしい？」

(12) (山田がその女性に送った(ママ)指輪を、ちゃんとはめていてくれるかどうか、佐藤に見てもらっている)

山田：どうだ。見えるか？

佐藤：指輪 { $\phi$ /?を/\*は|はめているよ。

さらに、黒崎差仁子(2003)では、前述の無助詞文の7分類を踏まえた上で、無助詞になる理由を、「聞き手の情報を求める文」では主題の重なる回避、「聞き手への要求を表す文」「話し手、聞き手が主題の文」「眼前の事象について述べる文」「現象描写文の疑問文」「特別な表現」では対比の回避であるとし、「新しい話題の新規導入文」では、新たに話題として主題を導入していることのマーカーとして、対比感を表さない無助詞が選択されるとしたうえで、無助詞に先行談話とは関係せず、何の前提もないことを示すマーカーの働きがあるとしている。

これらの先行研究に共通しているのは、助詞「は」「が」などによって示されている提題、対比、及び情報の焦点化といった機能を前提とし、それらを回避することが無助詞の機能であるという主張である。しかし、これらの主張は無助詞の機能をそれ自身として積極的に明らかにしているとは言いがたい。本稿は、これらの先行研究での考察及び主張を否定し異議を唱えることを目的としたものではなく、これらの先行研究を踏まえつつ、無助詞の機能をそれ自身として積極的に明らかにすることを目的としたものである。

先行研究の中で無助詞の機能をそれ自身として積極的に明らかにしようとしたものとして長谷川ユリ（1993）がある。この論文では、まず、無助詞には「『 $\phi$ 』が単なる助詞の省略となっている場合と『 $\phi$ 』自体に機能を持つ場合がある」とし、「話し手・聞き手の視野にあるものや話し手や聞き手にかかわることを具体的に示している語のあとに『 $\phi$ 』が現れている」としている。その上で、「 $\phi$ 」の担う機能を「取り出し」とし、「『 $\phi$ 』は話し手が聞き手に伝えたいことがらの基盤となるものを取り出して聞き手に指し示す、という役割を担っている」、「『 $\phi$ 』で聞き手に何について話したいのかをまず前置きの伝え、聞き手に働きかけるきっかけを作る」としている。さらに、「取り出し」には、「聞き手に注意を喚起しようとして合図を送るためにある語句を取り出す機能」である「信号性」と、「取り立て助詞の『ハ』の持つ対比性や『ガ』『ヲ』などの持つ排他性の意味合いを避け、中立的にするために取り出す」ものである「やわらげ」があるとしている。次の（13）（14）<sup>(7)</sup>はそれぞれ「信号性」「やわらげ」の例である。

（13）（電気にぶつかりそうになるのに気づき）

電気、アブないからー

（14）（電話をかけようと思い10円玉を借りようとして）

こまかいの $\phi$ （ガ？/ハ？）、ある？

「取り出し」の中の「やわらげ」は、対比性や排他性の意味合いを避けるという機能である。従って、無助詞の機能をそれ自身として積極的に明らかにしたものとは言えない。「信号性」は確かに「話し手が聞き手に伝えたいことがらの基盤となるもの」を「取り出し」ている。しかし、提題助詞「は」によって示され主題化されたものも「話し手が聞き手に伝えたいことがらの基盤となるもの」と言えなくもなく、両者の違いが明確になっているわけではない。

## 2.5 地域差・方言差について

「無助詞」の使用には、地域差・方言差があることが指摘されている。井上史雄（1992）は、『方言文法全国地図 第1集 助詞編』（国立国語研究所 1989年）をもとに無助詞の分布について、「無助詞はとびとびに東北・近畿・九州に分布し、ABABA分布といたくなる。」とし、「を格」での無助詞が一番多く、その次に「が格」、続いて「に格」の無助詞表現が多いこと、そして、「の格」の無助詞が一番少ないと述べたあと、「本土方言では、『の格』と『に格』が無助詞の方言では、ほぼかならず『が格』でも無助詞で、その方言ではさらに『を格』が無助詞という、含意規則 *implicational rule* がみられる。」としている。

本稿の筆者は1960年代後半に東京で生まれ、言語形成期から20代を大阪府北部で過ごし、その後30代から40代前半にかけて九州中部に在住、2014年から現在まで京都で生活をして

いる。本稿では、「無助詞」の地域差・方言差は考察の対象外とし、「無助詞」に対する文法性の判断や意味・機能の分析は、筆者の内省によるものとする。

## 2.6 本稿の立場と考察の対象のまとめ

ここまでの先行研究の概観を踏まえ、本稿の立場と考察の対象をまとめると、以下のとおりである。本稿では、無助詞であること（助詞の有無）がその文の意味になんらかの影響を与えているという立場をとる。その上で、先行研究の多くが指摘しているような、提題、対比、及び情報の焦点化といった機能を前提とし、それらを回避することが無助詞の機能であるとする主張を踏まえつつも、そのような消極的な説明ではなく、どのような状況や場面、及びどのような談話の中で無助詞文が使われるのかについての考察を通じて、談話における無助詞の機能をそれ自身として積極的に明らかにすることを試みる。なお、どのような格が無助詞になりやすいのか、そしてそれぞれの格がどのような条件で無助詞になるのかといったことや、無助詞に関する地域差・方言差等については、考察の対象としない。

## 3. 無助詞が出現する場面・談話、無助詞文の特徴

前節では、無助詞に関する先行研究を概観するとともに、本稿の立場と考察の対象を示した。この節では、先行研究をふまえつつ、無助詞が出現する場面や談話、無助詞文の特徴を整理する。

### 3.1 談話の展開と無助詞文

次の(15)は、学生と先生との間の、研究室での会話である。

- |                                    |   |   |
|------------------------------------|---|---|
| (15) 学生：先生、今お時間φ、ありますでしょうか？        | ] | ① |
| 先生：はい。大丈夫ですよ。                      |   |   |
| 学生：実は、なかなかレポートが書けなくて困ってるんです。       | ] | ② |
| 先生：そう。                             |   |   |
| 学生：何か参考になる本φ、ないでしょうか？              | ] | ③ |
| 先生：そうですね。そこの本棚にいろいろあるから、探してみてください。 |   |   |
| —————                              |   |   |
| 学生：先生、この本φ、お借りしてもよろしいでしょうか？        | ] | ④ |
| 先生：いいですよ。じゃあ……。                    |   |   |

この会話は、複数の文があるまとまり、ここでは「本の貸し借り」というまとまりをもって展



開し、一つの言語単位となっている。日本語記述文法研究会編（2009c）は、「談話とは、人がさまざまな言語表現を用いて、コミュニケーション活動を行うことである。また、そのような活動を通して産出された言語的・意味的なまとまりを談話と呼ぶ。」としている。従って、この会話は談話である。

(15) は、全体で「本の貸し借り」という一つの談話であるが、その内部は、より小さな談話に分けることができる。具体的には、①「時間の有無の確認」、②「悩みの開示と対応」、③「本の有無の質問と答え」、④「貸借の可否の質問と答え」という四つの談話からできている。そして、①、③、④の談話の冒頭の文では無助詞文が使われている。次の(16)も四つの小さな談話からできているが、無助詞文は②「出自」③「行動の指摘」④「声の大きさ」という談話の冒頭文で出現している。<sup>(8,9)</sup>

(16) (一つのイヤフォンを使って二人で音楽を聴いた後で)

亜矢：「……なに」

志乃：「恋は下心。そんで、愛は真心」「ラブとライクの違いだよ。あたしにはそれがわかるんよ」「恋っていう文字には下に心があるから下心。愛は真ん中にあるから真心なんよ」

男子：「それφ、昔ウッチャンナンチャンのナンチャンのほうが言っとったよな」

志乃：「なによーあんた達φ、聞いてったん？」

男子：「お前の声φ、でかいからよ」

(『桐島』)

また、次の(17)のような、家に電話をかけ人を呼び出す際の会話や、すでに(4)で指摘したように(18)のような返信メールでも、無助詞文は談話の冒頭で出現している。

(17) A：もしもし、山田さんのお宅でしょうか？

B：はい。

A：私φ、京都産業大学の今西と申します。

B：あっ、いつもお世話になっております。

A：たかし君φ、ご在宅でしょうか？

(18) メールφ、確かに受け取りました。((4)を再掲)

無助詞文が談話の冒頭で出現していることは、次の(19)の例にも見られる。

- (19) (壁に掛けられた、若くして亡くなった人が描いた油絵を見ながら)「凄いなァ……」「二十歳で死んでもたんか……」「そしたら、この人、何歳のときにこの絵を描いたんやろ？」 (『星々』)

これらのことを踏まえ、本稿では、無助詞文がある談話の冒頭で出現するということを指摘しておく。ただし、(15)の②や(16)の①で無助詞文が出現していないことからわかるように、ここでの指摘は、ある談話の冒頭は無助詞文でなければならないということの意味するものではない。

### 3.2 話し手と聞き手との間の知識(情報)の共有と無助詞文

次の(20)は、話し手が指示語「これ」の指示対象を手にして聞き手に示す、あるいは聞き手にわかるように指示対象を指さしながら発話しているものであり、指示語「これ」が無助詞となっている文である。

- (20) (手に持っている本を聞き手に示しながら)  
「これφ、捜してるんですか」 (『星々』)

大谷博美(1995a)では、ダイクシスを伴うヲ格の名詞をいきなり聞き手に提示する場合は「ハもヲも使えない文」として示されており、(20)や次の(21)(22)がこれに該当する。

- (21) (手の届かないところにあるものを指さしながら)  
ごめん、それφ、取って。  
(22) 先生、この本φ、お借りしてもよろしいでしょうか？ ((16)中の文を再掲)

ダイクシスを伴う名詞は、次の(23)(24)で無助詞となっている名詞句がそれぞれガ格、デ格であり、ヲ格ではないことからわかるように、ヲ格に限られるわけではない。

- (23) (遍路が車の前を横切ったため急停車した後、再び走り出した直後の車の中で)  
比奈子：「このあたりφ遍路道になってるの」  
文也：「うん。この横浪半島を通って足摺岬の方にむかっているんだ。……」 (『死国』)  
(24) (目的の喫茶店の入り口に到着した直後に)  
「この喫茶店φ、何時間粘ってても、いつまでも無視してくれるぞォ」 (『星々』)

また、次の (25) (26) のように、名詞 (句) がダイクシスをともなっていない場合もある。

(25) (勇の家の裏口のインターホンを押して)

志水：「俺や、志水や」

勇：「何んやねん？」

志水：「おい、勇、天体望遠鏡φ、いまでも物干し台に置いてあるかァ？」

(『星々』)

(26) (食事中に、馬締がタケおばあさんに悩みごとを相談している。)

タケおばあさん：「それにしても、いい年してよくもそんな子どもみたいなことで  
悩めるねえ。ほんとうにみっちゃんは、頭でっかちのアンボンタ  
ンだよ」

(馬締はしばらく無言で、食事をしながら、あることばの意味や使い方を考えてい  
る。)

タケおばあさん：「みっちゃんはさ、頼めば電球φ替えてくれるじゃない」

馬締：「それは、もちろん」

(『舟』)

(25) (26) で無助詞となっている名詞 (句) は総称表現ではなく、それが表すものが発話場面に実際に存在し、話し手、聞き手ともに当該発話が行われる以前にすでに同定しており、従って当該発話の冒頭において容易に同定可能なものである。

さて、(20) から (26) の例文に対する考察として重要なことは、談話の冒頭で話し手が聞き手に名詞 (句) で表されているものを提示することを通じて、発話時において指示対象が話し手と聞き手との間に知識 (情報) として共有されることである。つまり、話し手は、ある発話場面の冒頭で、後に続く発言の前提となるある知識 (情報) を無助詞の名詞 (句) で聞き手に提示する、そして、そのことによって、話し手と聞き手はある知識 (情報) をその発話場面で共有するということである。なお、この知識 (情報) は、当該発話場面で初めて話し手と聞き手との間で共有されても、当該発話場面より前に何らかの形で共有されたことがあるものが、当該発話場面で改めて共有されてもよい。例えば、(21) の「それ」の指示対象は、前者の可能性も後者の可能性もあり、(22) の「この本」は、後者である。

共有される知識 (情報) は、次の (27) (28) のように事柄の場合もある。

(27) (別れて暮らす父親のところ、大学へ支払う入学金の相談をしている途中で)

父親：「わしがここにいることφ、お母ちゃんも知ってるのんか？」

ぼく：「もうずっと前から知ってるよ」

(『星々』)

(28) (幼なじみの比奈子と文也が、山道を歩き、現在の生活について話した後、煙草を

吸い始めた比奈子が煙を吐きながらあたりを見回し)

比奈子：「莎代里ちゃんと文也君と、三人そろって最後に神の谷に来た時のこと、  
覚えてるわ。小学校の四年生だったでしょ」

文也：「あれが三人で来た最後だったのか」 (『死国』)

これらのことから、無助詞文で無助詞となっている名詞（句）は、話し手が、談話展開の冒頭で、後に続く発言の前提となるある知識（情報）を聞き手に提示している「もの」や「こと」であり、そのことによって、話し手と聞き手はある知識（情報）をその発話場面で共有するということができる。

### 3.3 文の情報構造と無助詞文

2.3節で指摘したように、先行研究では、助詞「は」「が」などによって示されている提題、対比、及び情報の焦点化といった機能を前提とし、それらを回避することが無助詞の機能であるという主張がなされている。この点と3.2節での議論を踏まえつつ、文の情報構造を中心に無助詞文を分析する。

次の(29)から(31)は、電話等で少し前に配車を依頼をしていた（かつ、そのことを話し手と聞き手が当該発話場面よりまえに知識（情報）として共有している）タクシーが近づいてきていることを、そのことに気がついていない聞き手に話し手が伝える文である。

(29) \*あつ、タクシーは来ましたよ。

(30) ?あつ、タクシーが来ましたよ。

(31) あつ、タクシーφ、来ましたよ。

(29)の文では助詞「は」が使われているが、この場面での発話としては不自然である。野田尚史(1996)では、『『は』には、対比的な意味が感じられるものがある。』とした上で、「対比を表すといわれる『は』にも、対比専用の場合と、対比兼用の場合がある」とし、「対比兼用というのは、…(中略)…、主題を表すと同時に、対比の意味ももっている」としている。(29)の文の意味を文脈を考慮せずに考えると、まず対比的な意味が感じられる。しかし、電話等で頼んでいたタクシーが近づいてきていることを伝える場合に、例えば「バスは来ていない」といった範列的な意味を含意する必要はないため、この場面での発話としては不自然となっていると考えられる。また、(29)の文に対比的な意味がない、即ち「タクシーは」がこの文の主題であるとした場合、この文の情報構造は主題である「タクシー」が既知の情報（旧情報）、その解説である「来ました」が未知の情報（新情報）ということになる。しかし、この場面では、「タクシー」ということについては話し手と聞き手との間で当該発話場面よりま

えに知識（情報）として共有がなされてはいるものの、例えば、配車依頼後タクシーの到着までの間にタクシーとは別のことを話すなどし、配車依頼の時点から当該発話時点まで談話の中で「タクシー」が主題、既知の情報（旧情報）であり続けているとは考えにくい。このため、当該発話場面の冒頭で提題助詞「は」によって「タクシー」が主題であることが明示されている（29）の文は、この場面での発話としては不自然な文であると考えられる。

（30）の文では助詞「が」が使われているが、この場面での発話としてはやはり自然とは言えない。野田尚史（1996）では、『が』には、排他的な意味が感じられるものがある。」とした上で、「排他を表す『が』にも、排他専用のもつと、排他兼用のもつがある」とし、「排他兼用の『が』は、まず第一に、主格を表している。そして、…（中略）…条件によって、結果的に排他的意味を感じさせる」としている。（30）の文の意味を文脈を考慮せずに考えると、排他的な意味を持っている、すなわち、「他ならぬ（バスや自家用車ではない）タクシーが来た」という意味であると考えることができる。しかし、このように考えると、「タクシー」が未知の情報（新情報）、「来ました」が既知の情報（旧情報）ということになり、この発話場面でのそれぞれの情報の位置づけ、特に、「来た」ことが未知の情報（新情報）であるということに対応しない。このため、（30）の文は、この場面での発話としてはやや不自然であると考えられる。また、（30）の文に対比的な意味がない、即ち「が」は主格を表しているだけであるとも考えることもできる。この場合、（30）の文は現象描写文ということになる。仁田義雄（1991）によると、現象描写文とは「ある時空の元に生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べたもの」であり、「文全体が新情報の文である」とされている。この発話場面において、「タクシーが来たこと」全体を未知の情報（新情報）として話し手が聞き手に提示することが出来ないわけではない。しかし、この発話場面以前に話し手と聞き手との間で「タクシー」のことが知識（情報）として共有されているということとの整合性がとれていないと考えると、やはり（30）の文は、この場面での発話としては不自然であると判断される。

（31）の文は、「無助詞文」である。3.2節での議論から、助詞が使われていない「タクシー」は、談話展開の冒頭で、後に続く発言の前提となるある知識（情報）として聞き手に提示している「もの」や「こと」であり、そのことによって、話し手と聞き手はある知識（情報）、ここでは「タクシー」をその発話場面で共有することになる。そして、これは、ここでの「タクシー」が、電話等で少し前に配車を依頼したものであり、かつ、そのことを話し手と聞き手が当該発話場面よりまえに知識（情報）として共有していること、配車依頼後タクシーの出来までの間にタクシーとは別のことを話すなどし、配車依頼の時点から当該発話時点まで談話の中で「タクシー」が主題、既知の情報（旧情報）であり続けているとは考えにくいこと、「タクシー」が後に続く未知の情報（新情報）である「来ました」の前提となる知識（情報）であることと合致する。そして、このような「タクシー」という知識（情報）をこの発話場面、

談話展開の冒頭で話し手が聞き手に新たに提示し、既知の情報（旧情報）として共有しようとしていると考えられ、その結果、(31)がこの発話場面で最も自然な文であると判断される。

これらの議論から、文の情報構造と無助詞文について、以下のようなことが言える。まず、無助詞文で無助詞となっている名詞（句）は、ある談話が展開され始める時、又はある談話が展開される以前から話し手と聞き手の間で知識（情報）として共有されると話し手が認識している「もの」や「こと」である。このような意味では、無助詞となっている名詞（句）は既知の情報（旧情報）である。しかし、この名詞（句）は、直前までの談話とは異なる談話の冒頭にあり、直前の談話で主題となっていたのとは別の「もの」や「こと」である。このような意味では、無助詞となっている名詞（句）は未知の情報（新情報）である。そして、話し手は、ある談話の冒頭で、既知の情報（旧情報）としての性格と未知の情報（新情報）としての性格を併せ持つ名詞（句）を無助詞のかたちで主題として設定し、新たに設定された主題に関する未知の情報（新情報）を後続部分で聞き手に提示している。

### 3.4 文の発話機能と無助詞文

3.1節から3.3節では、主に無助詞である名詞（句）に焦点を当てて無助詞文を分析してきたが、この節では、無助詞である名詞（句）に後続する部分にも焦点を当て、無助詞文が談話においてどのような発話機能<sup>(10)</sup>を有しているのかについて、実例をもとに分類、整理する。

まず、無助詞文は、次の(32)から(35)のような、話し手が聞き手から情報を引き出すことを目的とした「質問」という発話機能を持つ文との相性がいい。

(32) (無言で洗濯物を干している栗山に、泉水の中のおおみどろをかき回しながら話しかける。)

ぼく：「奥さんの具合、いかがですか？」

(洗濯物を干すのをやめ、泉水のところにやってきて、煙草をくわえながら)

栗山：「もうあと二、三日じゃないかって言うんですよ」 (『星々』)

(33) (馬締が異動先の辞書編集部のある部屋にはじめて入ってきた場面。部長が西岡に目で指示した直後に)

西岡：「ようこそ、辞書編集部へ」

(馬締を室内に導き入れながら)

西岡：「人員不足で、机はいくらでもあまってんだけど、ここでいいか？」

馬締：「はい」

西岡：「まじめさあ、彼女いる？」

馬締：「いいえ」

(『舟』)

(34) (研究室で、フラスコを見ながら)

利明：「この細胞のメッセンジャー RNA を取っておいてくれないか」「β酸化系酵素の誘導をノザンプロットで調べて見たい」

朝倉：「……これφ、なんの細胞なんですか？」 (『パラサイト』)

(35) (かつて同僚だった刑事が家に訪ねてきて)

何森：「久しぶりだな」

荒井：「……どうしたんですか、何森さん」

何森：「言っただろう。ちょっと聞きたいことがあって来たんだよ」

荒井：「今、どちらに？」

何森：「出戻りだ。狭山署」

荒井：「——で、わざわざこちらまで？」

何森：「ああ。お前、もんなって男φ、覚えてるか」 (『デフ』)

日本語記述文法研究会編 (2003) によると、「質問という機能をもつ疑問文は、1) その内容に関して不明の点があるために話し手の判断が成り立たず、2) 話し手は聞き手にとしかけることによってその疑問を解消しようとするという、2つの性質を持っている。」としている。無助詞文は、次の (36) (37) のように、この2つの性質のうち1) の性質を欠く「確認要求」という発話機能を持つ文や、(38) (39) のように、2) の性質を欠いた、「疑い」という発話機能を持ったものとの相性もよい。

(36) (酒場で、酒をグラスにつごうとしてテーブルに並んでいる空き瓶を次々に手に取りながら)

「君これφ全部飲んだのかね」「大丈夫か、君」 (『乙女』)

(37) (馬締が女性へのラブレターを書いているところに西岡がやってきて)

西岡：「『謹啓 吹く風に冬將軍の訪れ間近なるを感じる今日このごろですが、ますますご清栄のことと存じます』って、なんだそりゃ！」

馬締：「だめでしょうか」

西岡：「もっとリラックスして、楽しくさあ。だいたい、いまどき手紙ってどうなの。香具矢ちゃんφ、ケータイφ持ってんだろ？ せめてメールにしたら？」

(『舟』)

(38) (食事の支度ができたテーブルを囲んで)

みゆき：「いただきます」

(自分が作った煮魚を口に運んで)

みゆき：「ちょっと味φ薄かったかなあ」

荒井：「いや、ちょうどいいよ」 (『デフ』)

- (39) (列車のなかで、通りがかった男に)

比奈子：「あの……あなたφ君彦君じゃないかしら……」

島崎：「比奈子お？ 嘘やろ」

(['死国'])

なお、「確認要求」の中には、次の(40)(41)のように、対人性が希薄となり、(38)(39)と同様やや独話的なものもある。

- (40) (女性が、写真をみせながら相手の家族の話をしようとしているの、無言でいる男性に対して)

みゆき：「家族の話するのφいやだったのよね……ごめんなさい」

荒井：「そういうわけじゃない。まだ寝起きでほうっとしてるんだ」(['デフ'])

- (41) (旅行に誘っている)

良介：「じゃあ、行かない」

琴美：「あ、そうか……。だから、さっきの電話。梅崎先輩から、来週末、一緒に伊豆高原に行かないかって誘われてんの」

琴美：「ねえ、私φ、その人に会ったことあったっけ？ 電話で『久しぶり』なんて言われて、ちょっと焦っちゃった」

良介：「ほら、この前、洗濯機を運んでくれた俺の先輩」(['パレード'])

次に、無助詞文は、次の(42)から(44)のような、秘密や心の中で思っていたことをありのまま打ち明けることを目的とした「告白」という発話機能を持つ文との相性がいい。

- (42) (ハンカチ顔を押さえている初対面の女子高生との会話)

良介：「あのお、なんかあったんですか？」

女子高生：「別になんでもありません」

良介：「あ、俺φ、実はこの前も君みたいに泣いてる子をここで見かけて……。君も402号室に来たんでしょ？ 俺φ、その隣の401号室に住んでるんだ」

(['パレード'])

- (43) (手話で会話をしていたところ、途中で音声日本語で)

女性：「ごめんなさい」「あなたの手話φ、速すぎてついていけないわ。あなたφ、もしかして——」

荒井：「ああ、あなたにはちょっと難しかったかもしれませんね」(['デフ'])

- (44) (ベットで荒井と抱き合いながら)

みゆき：「あなたのことφ、知りたい……。もっと知りたいの……」(['デフ'])



「告白」という発話機能が有する「秘密性」や「打ち明ける」という側面が希薄になると、次の(45)(46)のような「意見・考え・情報の提示」や、(47)(48)のような「(事実の)報告」という発話機能をもった文にずれ込んでいく。

- (45) (絵の下に張られ、絵の題、作者名、作者の没年と享年が書かれたた小さな紙を見ながら次々と絵について話している)  
 有吉：「凄いなァ……」「二十歳で死んでもたんか……」「そしたら、この人φ、何歳の時にこの絵を書いたんやろ?」「この絵φ、もっとほかの題がつけられたら、何でもないただの絵かもしれへんなァ」 (『星々』)
- (46) (古くなった家をどうするかのかについて相談している際、話が本筋からずれ、持ち主の人柄の話になりはじめた後に)  
 「どちらにしろあの家φ、ずいぶん老朽化しているみたいですから、遅かれ早かれ、何とかしないとイケないと思うんですが」 (『死国』)
- (47) (捜査状況を探るように頼まれていた人が、その話を切り出して)  
 「例の事件のことφ、聞いてきたわ。被害者の…(略)…」 (『デフ』)
- (48) (父親の臨終に立ち会うことができなかつた息子に母親が)  
 「なんで、病院にけえへんかったんや」「お父ちゃんφ、夕方の六時に息を引き取りはった。ひとつも苦しまんとはった」 (『星々』)

無助詞文は、話し手が聞き手にある行為を行うこと(あるいは、行わないこと)を聞き手に求める「行為要求」という発話機能を持つ文との相性もよい。次の(49)から(52)は、それぞれ「命令」「依頼」「勧め」「禁止」といった、「行為要求」の中に含まれる発話機能を有した無助詞文である。

- (49) (受験勉強に励む友人との電話での会話)  
 草間：「もう、へとへとや」  
 ぼく：「いまがいちばん辛いときや。もうちょっとやないか」「K大の医学部φ、絶対に通れよ。癌なんかやっつけてしまう医者になってくれ」 (『星々』)
- (50) (恋人関係にある二人[みゆきには娘がいる]の会話)  
 みゆき：「——運動会φ、来てくれる?」  
 荒井：「分かった。行くよ」 (『デフ』)
- (51) (冷蔵庫のドアを開けながら)  
 良介：「これφ、琴ちゃんが淹れてくれたの」  
 琴美：「あ、それφ飲まない方がいいよ。私じゃなくて直輝君のだから。ジャスミ

ン茶だか何だか、今朝わざわざ沸かしてたみたい」 (『パレード』)

(52) (2名の女性の会話)

勝美：「東京に戻る前に忘れんと、うちによってくださいよ。神明さんのサインの、  
ポスターに書いてもらおう思いゆうがやき」

神明：「サインなんて……そんな恥ずかしいわ」

堅：「勝美のゆうこと、取り合わんといてください。こいつ図々しいがやき」

(『死国』)

「行為要求」は、次の (53)<sup>(11)</sup>のように、行為を要求する相手が抽象化することで「願望の表出」「祈願」といった発話機能に、(54)のように、特定の言語形式によって発話機能が明示的に示されていないものの、「行為要求」であることが間接的に示されている「忠告」という発話機能に繋がっていく。

(53) (小さい女の子の発言)

「荒井のおじちゃん来てくれないかなー」 (『デフ』)

(54) (テレビを見ながら煎餅を食べている孫娘とおばあさん)

香具矢：「タマさんの司会って、ビミヨーに心がこもってなくて絶妙だね」

タケおばあさん：「あんた、そんなに煎餅食べたら、お昼が入らなくなるよ」

(『舟』)

ここで分類・整理は、無助詞文が有する発話機能を網羅しているわけでもなく、また、無助詞文が使われる必要条件を明らかにすることを目的としたものでもない。しかし、(32)から(54)で提示した発話機能は、「質問」「告白」「行為要求」など、いずれも対人性が強く含まれるものであり、無助詞文が有する発話機能に一定の傾向があることがうかがわれる。無助詞文の使用が話し言葉やくだけた会話に多いことが先行研究で指摘されているのは、このことの現れであると考えられる。

#### 4. 談話における無助詞の機能

この節では、前節で行った無助詞が出現する場面や談話、無助詞文の特徴の整理を踏まえ、無助詞の機能について考察する。

次の (55) は、取引関係のある会社間での電話による会話の冒頭部分である。

- (55) A: もしもし。
- B: はい。
- A: 京都産業株式会社様でしょうか。
- B: はい。
- A: 私φ、大阪興業株式会社の本山と申しますが。
- B: あっ、いつもお世話になっております。
- A: 荒木課長φ、お手すきでしょうか。
- B: 少々、お待ち下さい。

この会話は、全体で「電話での人の呼び出し」という一つの談話であるが、その内部は、①「相手の確認」、②「自己紹介」、③「呼び出し」という三つの談話からできている。そして、②、③の談話の冒頭の文では無助詞文が使われている。無助詞となっている名詞（句）は、②の「私」であれば①ですすでに会話が行われていること、③の「荒木課長」であれば既に両社（両者）が取引関係にあることから、話し手と聞き手の両者が発話時以前（または発話と同時に）に認識していると話し手が考えている「もの」や「こと」であると考えられる。この意味で、「私」「荒木社長」は話し手と聞き手にとって既知の情報（旧情報）である。しかし、「私」「荒木先生」は、②「自己紹介」③「呼び出し」という談話の冒頭にあり、この意味では、両者は話し手と聞き手にとって未知の情報（新情報）である。話し手は、情報に関するこのような認識のもと、「私」「荒木先生」をそれぞれの談話における主題として無助詞で設定する。そして、新たに設定されたこれら主題に関する未知の情報（新情報）を後続部分で聞き手に提示している。この際、無助詞文の発話機能は、②では「情報の提示」、③では「質問」（あるいは、「間接的な）行為要求」であり、対人性が強く含まれるものとなっている。

これらの分析から、談話における無助詞の機能、そして無助詞文について、以下のようにまとめることができる<sup>(12)</sup>。

対人性が強い談話において、話し手と聞き手の両者が発話時以前（または発話と同時に）に認識していると話し手が考えている「もの」や「こと」で発話時においてある談話の主題とはなっていない「もの」や「こと」を、談話の冒頭で新たな主題に設定する。その後、その談話で新たに設定された主題に関する未知の情報（新情報）を、対人性（聞き手）を念頭においた発話機能を有した文として、聞き手に提示する。

さて、これを踏まえ、次の (56) (57) を考えてみよう。

- (56) (壁に掛かっていた絵を数日後には元に戻す予定で盗み出した帰り道で)

「俺ゆ、胸がわくわくしてきたなァ。この絵ゆ、ほんとに俺のものになったらええのになァって、高校生のときからずっと思ってたんや」  
 (『星々』)

(57) (運動会におじちゃんに来てくれることを娘に伝える発話)

「美和、良かったね〜。おじちゃんゆ運動会ゆ来てくれるって。美和が走ってるところゆ、応援してくれるってさ〜」  
 (『デフ』)

(56) は、全体としての発話機能が「告白」であると考えられる談話である。この「告白」の主題として、当該発話場面で話し手と聞き手の両者によって認識され、既知の情報(旧情報)であると話し手が考えている「私」(話し手)を、話し手はこの談話の主題として冒頭で聞き手に初めて提示し、その時点での「私」の状況を続く部分で未知の情報(新情報)として提示している。次に、これも話し手と聞き手の目の前にあり、両者によって認識され、既知の情報(旧情報)であると話し手が考えている「この絵」を、それまでの主題である「私」に変えて新たな主題として聞き手に提示し、絵にまつわる自身の思いを続く部分で未知の情報(新情報)として提示している。(57) は、母親から娘(美和)への発話であり、全体としての発話機能が「報告」であると考えられる談話である。この「報告」の新たな主題として、当該発話場面で話し手と聞き手の両者によって認識され、既知の情報(旧情報)であると話し手が考えている「おじちゃん」「運動会」「美和が走ってるところ」を、話し手は次々に聞き手に提示し、続く部分で「来ること」「応援してくれること」を未知の情報(新情報)として提示している。

## 5. おわりに (今後の課題)

以上、本稿では、談話における無助詞の機能をめぐる考察を行った。その結果、無助詞は、対人性が強い談話において、話し手と聞き手の両者が発話時以前(または発話と同時に)に認識していると話し手が考えている「もの」や「こと」で発話時においてある談話の主題とはなっていない「もの」や「こと」を、談話の冒頭で新たな主題に設定するという機能があることを明らかにした。

本稿での考察を踏まえ、以下、今後の課題を簡単に述べる。日本語記述文法研究会編(2009b)では、文における「は」と「が」の使い分けを概観する中で、「文には主題をもつものと、主題をもたないものがある。前者を有題文、後者を無題文という。」としたうえで、「主語が主題として明示される場合は『は』で示される」「無題文では主語はそのまま『が』で示される」としている。そして、「話し手が、聞き手が指示対象を特定できると考えているものについては、主題をして『は』で示すことができる。」「談話に新たに導入されるものなど、聞き手が指示対象を特定できないと話し手が考えるものは、主題として示すことはできない」と述べている。この記述の仕方によって本稿で考察した無助詞の機能を説明すると、「話し手が、

聞き手が指示対象を特定できると考えているものを、談話の中に新たに主題として導入する場合は無助詞となる」ということになる。そうだとすると、有題文、無題文という主題にかかわる文の分類（及び、その下位分類）の中に無助詞文をどのように位置づけるのかという課題が出てくるが、本稿ではこの点について考察をすることができなかつた。今後の課題として残しておきたい。

## 注

- (1) 本稿では、音声によるものか文字によるものかにかかわらず、文が表す情報を発する側を「話し手」、受け取る側を「聞き手」として議論を進める。
- (2) 本稿では、無助詞であることをφで示す。なお、先行研究等から引用したもので、原典でφが使われていないものについては、その限りではない。
- (3) 「確定」でも省略可能なものとして、「陳述副詞が使われている」「現場・現在との関わり（筆者注：が深い）」「質問に対する答え」があげられており、「質問に対する答え」では、「当該事態の内容が現場（今・ここ）性があるもの>今・ここに限られないが時間の限定、時間の範囲の区切りがある一時的状態・動作>論理的・普遍的判断、の順に『は』を省略し易くなる」としている。
- (4) 「聞き手への配慮」には、「聞き手の持つ情報に対する配慮」「認識の差に対する配慮：よ、じゃないか」「同一認識に対する配慮：ね」「聞き手のもつ情報との食い違いに対する配慮：～なんかじゃない」「のだ」「話し手と聞き手との関係に対する配慮-対人的配慮」があるとしている。
- (5) 加藤重広（1997）、例文番号 157a）を引用したものである。
- (6) 加藤重広（1997）、例文番号 167）を引用したものである。なお、これは、大谷博美（1995a）の例文番号（12）の引用であり、従って「(ママ)」との表記がある。
- (7) 長谷川ユリ（1993）、例文番号（22）、及び（36）を引用したものである。
- (8) (16) は原文から地の文を省略して発話文のみにし、必要に応じて発話者や発話の状況がわかるようにするとともに、無助詞であることがわかるようにφを筆者が追加したものである。以下の用例で、小説等の実例を使用する場合も同様である。
- (9) ②③④の談話は一文でできている。これは、②③の質問に対して、それぞれの聞き手が直接的に回答をすることなく、話を少しずらして展開していると考えられることによる。
- (10) 山岡正紀（2008）では、「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの」のことを「発話機能」とし、「発話がある発話機能を発動するためには、その発話から語用論的条件を捨象した文が、当該言語における一定の文機能を持っていなければならない」としている。また、このような「機能」は、「その所在を文末形式のみに帰着させようとするところに無理があり、」としている。なお、本稿で用いる発話機能の名称は、無助詞文の分析・分類のために便宜上用いているものである。
- (11) 第三者（母親）によって引用された発言である。
- (12) 大谷博美（1995b）では、「主語となる要素が、話し手・聞き手間における固有の先行文脈によって共有知識となっており、しかも聞き手の頭の中である程度活性化されている場合、その要素に関する事態を描写して聞き手に提示しようとする」と、「ハもガも使えない文」になると述べているが、本稿での談話における無助詞の機能、そして無助詞文についての分析（まとめ）は、これを参考にしつつ対象を広げより一般化したものとなっている。

## 用例出典

- 『乙女』：森見登美彦（2008）『夜は短し歩けよ乙女』（角川文庫）  
 『桐島』：浅井リョウ（2012）『桐島、部活やめるってよ』（集英社文庫）  
 『死国』：坂東眞砂子（1996）『死国』（角川文庫）  
 『デフ』：丸山正樹（2015）『デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士』（文春文庫）  
 『パラサイト』：瀬名秀明（1996）『パラサイト・イブ』（角川ホラー文庫）  
 『パレード』：吉田修一（2004）『パレード』（幻冬舎文庫）  
 『舟』：三浦しをん（2011）『舟を編む』（光文社）  
 『星々』：宮本輝（1984）『星々の悲しみ』（文春文庫）

※なお、本文中に出典が示されていない用例は、著者による作例、又は先行研究からの引用である。

## 参考文献

- 井上史雄（1992）「社会言語学の方言文法」『日本語学』11巻6号（明治書院）  
 大谷博美（1995a）「ハとヲと $\phi$ -を格の助調の省略」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』（くろしお出版）  
 大谷博美（1995b）「ハとガと $\phi$ -ハもガも使えない文」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』（くろしお出版）  
 尾上圭介（1996）「主語にハもガも使えない文について」認知科学学会13回ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」ハンドアウト  
 甲斐ますみ（1991）「『は』はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化』第17号（大阪外国語大学留学生別科・日本語学科）  
 加藤重広（1997）「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27号（富山大学人文学部）  
 黒崎佐仁子（2003）「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2号（早稲田大学大学院日本語教育研究科）  
 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』（むぎ書房）  
 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』（ひつじ書房）  
 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4』（くろしお出版）  
 日本語記述文法研究会編（2009a）『現代日本語文法2』（くろしお出版）  
 日本語記述文法研究会編（2009b）『現代日本語文法5』（くろしお出版）  
 日本語記述文法研究会編（2009c）『現代日本語文法9』（くろしお出版）  
 丹羽哲也（1989）「無助詞格の機能－主題と格と語順と－」『國語國文』第58巻第10号（中央図書出版社）  
 野田尚史（1996）『「は」と「が」』（くろしお出版）  
 長谷川ユリ（1993）「話しことばにおける『無助詞』の機能」『日本語教育』80号（日本語教育学会）  
 松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』（紀元社）[国立国会図書館デジタルコレクション〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1225783>〉よりタウンロード]  
 丸山直子（1995）「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19巻8号  
 丸山直子（1996）「助詞の脱落現象」『月刊言語』25巻1号（大修館書店）  
 山岡正紀（2008）『発話機能論』（くろしお出版）  
 山田孝雄（1908）『日本文法論』（宝文館）[国立国会図書館デジタルコレクション〈<http://dl.ndl.go.jp/>]

info:ndljp/pid/992499) よりダウンロード]  
渡辺実 (1971) 『国語構文論』 (塙書房)

